「大きい」と「大きな」

南　波　千　春

［キーワード：①形容詞　②連体詞　③形式名詞　④連体修飾節］

1. はじめに

「い形容詞」（形容詞）と「な形容詞」（形容動詞）の両方の品詞の活用を持つ語として「あたたかい／あたたかな」、「細かい／細かな」、「柔らかい／柔らかな」などがある。

また、「い形容詞」の活用しか持たないものの、名詞修飾の時だけ「…な」の形を持つものとして「大きい／大きな」、「小さい／小さな」、「おかしい／おかしな」がある。この「大きな」「小さな」「おかしな」は、活用を持たず、名詞を修飾する語であるので、連体詞として分類されている。

本稿は、形容詞の「大きい」（以下「い形」）と連体詞の「大きな」（以下「な形」）のペアを取り上げ、この2つの形がどのように使い分けられているのかを考察する。なお、連体詞の「大きな」は、名詞の前にしか出現しないので、「大きい」についても名詞に接続するものに限って分析を行う。

2. 先行研究

主な先行研究として、國廣哲彌　他（1982）、三枝令子（1996）、佐々木文彦（2002）、森田良行（1977）、飛田良文・浅田秀子（1991）や、辞典の類がある。

これらの先行研究では、以下のような点が「い形」と「な形」の使い分けとして指摘されている。(1)「名詞に係る場合、抽象名詞には連体詞「大きな」を用いるのがふつうである。これに対して、「大きい」は具体的な事物に使うことが多い。」（森田 1977）。これは國廣他（1982）や三枝（1996）でも指摘されている。(2)「「大きい」「小さい」は、客観的な大きさ、物理的な大小を問題にしていると言える。（中略）心理的な大きさについては、「な形」の方がふさわしいと言える。」（三枝 1996）。(3)「連体修飾節の中の述語用法には「な形」が来にくい」（三枝 1996）ということが、國廣 他（1982）の同様の論を踏まえた上で述べられている。(4)「「い形」は、形式名詞に接続することが多い」（三枝 1996）。このような4点が両者の相違点として既に指摘されている。

3. 調査・分析方法とその結果

本研究では、①小説（新潮文庫）52冊124作品分、②シナリオ「寅さん」シリーズ40作品分、③社会系新書13冊分、④歴史系新書10冊分、⑤自然系新書9冊分、⑥言語系新書8冊分、⑦白書5冊分の、全7種類、137冊（209作品）を対象として調査を行った。

結果は以下の［表1］の通りである。分類については、まずは、先行研究で「大きい／大きな」が主語のある連体修飾節の中の述語になる場合は、「な形」が来にくいということが指摘されているので、以下の例のような用例を「連体節の述語」として分類した。

目が大きい女の子が立っていた。

また、本稿では「大きい」が終止形などの、名詞が接続しない例は分析対象外とし、「名詞に接続しない」に用例数のみを記載した。名詞が接続する用例は、先行研究で「い形」には形式名詞が接続しやすいことが指摘されているため、以下の例のように普通名詞と形式名詞とに分類した。

なお、形式名詞については、実質名詞、または接続助詞との区別が難しいところもあるが、今回の分析においては、「こと・の・もの（物・者）・もん・ほう・うち・ゆえ・なり・ところ・ころ・くせ・まま・ため・ほど・かわり・わけ・ため・点・くらい・はず・わり・やつ・場合・子・うえ・時分・件」の28語を形式名詞として分類を行った。

［表1］「大きい／大きな」全データ

			大きい			大きな		
			連体節の述語	連体節の述語でない	計	連体節の述語	連体節の述語でない	計
名詞に接続	「大きい・大きな」＋名詞	普通名詞	73	273	346	41	2427	2468
		形式名詞	87	62	149	8	87	65
		計	160	335	495	49	2514	2563
	大きかった＋名詞		29			0		
名詞に接続しない			1869			0		
計			2393			2563		

※「大きい」のうち、「大きい＋普通名詞、かつ連体節の述語でない」273例の中に「おっきい」の1例も含まれており、「名詞に接続しない」1869例の中には「おっきい」の連用形「おっきく」の1例も含まれている。また、「大きな」のうち、「普通名詞に接続する、かつ連体節の述語でない」87例の中に「おっきな」の3例も含まれている。

大きいカバンを持っている。 … 普通名詞
大きい子が走ってきた。 … 形式名詞

4. 分析

4.1. 「大きい」と「大きな」に接続する形式名詞

三枝令子（1996）で指摘されている「体言に連なる場合、「い形」が修飾するのは圧倒的に形式名詞が多い」ということを検証していく。

［表1］を見ると、名詞に接続する「い形」の495例のうち149例が形式名詞に接続し、約30%が形式名詞に接続しているのに対し、「な形」は2563例のうち65例しか形式名詞に接続しておらず、約2.5%である。ここから「い形」には形式名詞が付きやすいことが確認できる。

4.2. 連体節の述語となる「大きい」と「大きな」

國廣哲彌　他（2001）や三枝令子（1996）で指摘されていた「連体修飾節の中の述語には「な形」が来にくい」ということについては、連体節の中の述語になっている数が「い形」が495例のうち160例（約32%）であった。それに対して「な形」は2563例のうち49例（約2%）であった。ここから、連体節中で述語になる場合「い形」になりやすいと言える。

また、今回の調査から「い形」が連体節中の述語になる場合、その述語の主格を表す助詞が、以下の（1）～（4）のように様々な助詞が見られる。特に多いものは、「の」が65例、「が」が58例であるが、その差は大きくない。一方「な形」については、「が」に続く例が（6）の1例と「ばかり」に続く例が（7）の1例のみで、それ以外の47例は（5）のように「の」に接続している。

(1) この一般化は、階層差の大きい社会ではいっそう誤った考察を生みやすい。 ③『適応の条件』
(2) 同質性志向の強い、それだけになれあいの危険も大きい社会に、われわれは住んでいるようである。 ③『日本人の法感覚』
(3) わたくしがこの遺跡に関心をもつのは、祭祀遺跡として見た場合、その集落にとって規模が大きいことである。 ④『日本の神々』
(4) このように、景気循環における「外部性」を考慮すると、景気の累積的メカニズムは予想以上に大きいことがわかる。 ⑦『平成5年度版　経済白書』
(5) 脳の大きさをくらべると、体の大きな動物ほど脳も大きいのでクジラが最大の脳を持っています。 ⑤『全脳型勉強法のすすめ』
(6) バブル崩壊の過程で、投資家の損失が大きなものとなったのは、自己の体力をはるかに超えたリスクテイクが行なわれたためでもある。 ⑦『平成5年度版 経済

白書』

(7) 美恵子はすきとおるように青白い顔をした、眼ばかりやけに大きな子だった。

①「孤高の人」

以上のことから、主語のある連体修飾節に「な形」がくる場合は、主格を表す助詞に「の」が使われやすいことが分かる。

さて、以上の考察を踏まえて、先行研究で問題になっていた以下の例文について考えてみると、「な形」が連体節の述語になりにくいということの他に、連体節の述語が「な形」になっている文で、主格を表す助詞に「が」が使われていることが、不自然に感じられる原因だと考えられる。

口が小さい花瓶がほしい。

口が小さな花瓶がほしい。

「な形」が「の」に接続しやすいことを考えると、「口の小さな花瓶がほしい」とすれば、不自然さも多少緩和されるのではないだろうか。つまり「な形」が連体節の述語になる場合には、主格を表す助詞に制限があるということではないだろうか。

つまり、「大きい」と「大きな」が主語のある連体修飾節の述語になる場合は以下のような形になりやすいということが言えるようである。

口が大きい花瓶がほしい。

口の大きな花瓶がほしい。

連体節の主格を表す助詞の主なものは「が」と「の」であるが、現代語で終止法の主格を表す格助詞は「が」のみであるので、「が」が付くと、その体言は主語であり、後に述語がくるということが分かる。よって、文の述語になる終止形と同じ形の「大きい」という「い形」に「が」は接続するが、本来、終止形で述語になり得ず、必ず体言に接続する連体詞「大きな」には接続しにくいと考えられる。

また、木之下正雄（1961）によると、「が」は、主体とそれの動作性状を対立的に統合して出来事を叙述することに重点を置くのに対し、「の」は、被連体語に重点を置く。連体節はそれに帰属的な複合概念であると述べられている。よってここから、本来は、体言を修飾するためだけにある連体詞の「大きな」は、被修飾語の性質に重点がくる「の」と接続しやすく、形容詞の「大きい」は、活用を持ち、終止形と連体形が同じ「大きい」という形であることから、出来事に重点を置く「が」にも、被連体語に重点を置く「の」にも接続すると考えられる。(c.f. 木之下正雄（1961))

4.3. 「大きい」と「大きな」に接続する普通名詞

名詞に接続する「い形」の用例数が495例であるのに対し、「な形」は2563例と差があるため、単純に数の比較はできない。よって、どちらかの形に用例数が偏っている場合や、片方の形に全く用例がない場合の分析を行った。また、全体数が「な形」の方が

圧倒的に多いということが［表1］からも分かるが、それにも関わらず、「い形」に接続する数が多い場合、もしくは「い形」にのみ接続している名詞などの特徴ある名詞に接続している「大きい」と「大きな」を比較分析し、意味的な使い分けについて考察を行った。

それぞれの形がどのような名詞に接続しているのかについては、参考として、どちらかの形に3つ以上接続した名詞を一覧にして、最後に記載する。

分析の結果、以下の例（8）から（13）のように意味的な差がない名詞が大半であった。先行研究では、「い形」は、客観的な大きさ、物理的な大小を問題にしているが、心理的な大きさを述べる場合には「な形」を使用することが指摘されていたが、本研究においては、そのような意味的な差、使い分けは見られなかった。

(8) 栄二は頭を左右に振り、胸に溜まった毒気でも吐き出すように、ほうと長く大きい息を吐いた。 ①「さぶ」

(9) 松田はどなり返し、ふっと大きな息を吐きだしてから、少し穏やかに云った ①「さぶ」

(10) 鶴見山にしても、噴出する石は数かぎりなく飛び乱れ、大きい石は方丈（約九平方メートル）、小さい石でも甕の大きさほどあった。 ⑥『日本の神々』

(11) 庄九郎は草むらにしゃがんで大きな石をかかえあげた。 ①「国盗り物語」

(12) その悲劇の最も大きい原因は、この中央と現場の関係にあったのである。 ③『適応の条件』

(13) 香りがよくわかるようになりつつあるもっとも大きな原因は、食品素材が新鮮でなくなり、単純化したことではないだろうか。 ③『適応の条件』

しかし、「い形」を使うか「な形」を使うかによって差が出る場合もある。1つは、慣用句的な使われ方をしている場合であった。また、意味的に使い分けがあると見られる場合もあった。それについては、4.4.と4.5.で分析する。

4.4. 「大きい」と「大きな」の慣用句における使い分け

物理的に「大」であることを示す場合と、比喩的な意味で使用される慣用句的表現で使用される両方の使い方がある表現について考察を行う。

I 「大きい顔」と「大きな顔」

「大きい顔」が5例、「大きな顔」が16例あった。

(14) ぎんは頼囮の大きい顔の中の丸い眼を見ているうちに、突然、泣き出したい衝動にかられた。 ①「花埋み」

(15) おい、大きい顔をするのはよせ、ドブ鼠のくせに一人前の口をきくのはよせ。 ①「飼育」

(16) おねえさんがパチンコ台の上から、鼻のひしゃげた大きな顔を出して、どうしたのよなどと面倒くさそうに訊いたものだが、… ③『パチンコと日本人』

(17) あの社長が大きな顔をしていられるのも、今の内ですよ。 ①「女社長に乾杯」

「い形」は連体節になっているものが1例、(14) のような物理的に「顔が「大」である」ことを表す例が2例、(15) のような「態度が大きい様子」を表す例が2例で、「い形」は物理的な大きさを表す例と、慣用句的に使用される例が半分ずつとなっている。

「な形」は、連体節になっているものが2例、(16) のような物理的に「顔が「大」である」ことを表す例が7例、(17) のように「態度が大きい様子」を表す例が7例で、「な形」も物理的大きさを表す例と慣用句的な用例が同じ頻度で使用されていることが分かる。

以上のように、出現数や出現傾向を分析した結果、「大きい顔／大きな顔」の使われ方では、「い形」も「な形」もさほどの差は感じられず、両方の形とも「物理的なこと」と慣用句的な用法に半数ずつ使用されおり、両方の形での使い分けや意味の差は見受けられない。

Ⅱ 「大きいお世話」と「大きなお世話」

次に『日本国語大辞典』に慣用句として記載されている「おおきなお世話」について見て見ると、「お世話」は全部で10例あり、全て「な形」に接続している

(18)「誰だっていいでしょ！ 大きなお世話よ！」 ①「女社長に乾杯」

慣用句的に使用される「おせわ」については、「な形」に付くことが検証された。

Ⅲ 「大きい口」と「大きな口」

同じく『日本国語大辞典』の「大きな」の欄に記載されている「おおきな口」は、「偉そうなもの言い。大口」とある。

今回の調査では、「大きい口」が1例、「大きな口」が8例あった。

(19) たとえばあの男はケチだ、おごって見せたり、大きい口をきいてみせたりするが、 ⑥『日本人の言語表現』

(20)「女が大きな口をあけることは恥ずかしいことなのですよ」 ①「塩狩峠」

(21) 風は激しく西へ、時には東へ吹き荒れていた。ジャーナリズムの奈落は、大きな口を開けて獲物を待っていた。 ①「風に吹かれて」

「偉そうなもの言い」の表現は、「い形」の (19) の1例のみで、(20) のように物理的に「口が大きい」ことを表す表現が7例、(21) のような比喩的表現が1例であった。

『日本国語大辞典』では、「大きな口」の慣用句的表現である「偉そうなもの言い」が、「な形」の項目に記載されているが、今回扱ったデータでは、「偉そうなもの言い」の意味で使用されているのが「い形」に1例のみあり、「な形」には見られなかった。

ここからは意味の差や使い方の差は感じられない。

Ⅳ 「大きい目」と「大きな目」

また、『日本国語大辞典』に「大きな目」という慣用句が、2つ記載されている。「おおきな目で見る」が「細かいことにこだわらず、大局に立って観察し、考える。」と説明されており、また、「大きな目に逢う」が「大変な災難やひどい仕打などにあうことにいう。ひどい目にあう。」と説明されている。

「大きい目（眼）」が10例あり、「大きな目（眼）」が45例あった。

(22) 黒瞳の勝った大きい目が客に印象を与えた。 ①「点と線」

(23) ただ、入社試験などで入ってきた同じ職場の同期というのは、…（中略）…大きい目でみれば、その選抜には、その場の事情を背景とした能力主義が行なわれていると認められる。 ③『タテ社会の人間関係』

「おおきい目」の10例中9例が、(22) のような物理的に「目が大きい」ことを表しているもので、慣用句的に「細かいことにこだわらず、大局に立って観察し、考える。」の意味で使用されているのが、(23) の1例のみであった。

(24) あいつはきっと泣くな、あの大きな眼に涙がいっぱい、たまってよ、いくら気の強いあいつだってきっと泣くよ ②「寅さん」

(25) こう見てくると、行政権の首長が天皇から内閣に変化したことは大きな眼に立つ相違であるが、立法部と行政部のあいだで、国会の優位に権限の再配分がおこなわれているかとなると、さほどのことはないようである。 ③『憲法を読む』

「おおきな目」の45例中、44例は (24) のように、物理的に「目が大きい」ことを表す表現で、慣用句的表現は、(25) の1例のみで、「おおきな目で見る」という形ではなく、「大きな眼に立つ」という少し特殊な形ではあるものの、「細かいことにこだわらず、大局に立って観察し、考える。」という意味で使用されているようである。

慣用句的表現においても「い形」と「な形」が1例ずつの使用で、差は見られない。

4.5. 「大きい」と「大きな」の意味的使い分け

次に、慣用句ではない、物質的に「大」であることを表す場合の意味的使い分けについて「い形」と「な形」の両方に接続している名詞の用例を比較し考察する。

Ⅰ 「大きい声」と「大きな声」

「大きい声／大きな声」には、物理的に声が「大」であることを表す用例と、比喩的に「大きな声では言えないが…」と使用する用例がある。

今回は、「大きい声」は全部で24例あり、「大きな声」は238例あった。

(26) 高根は会社中に聞こえる大きい声で仕事にまったく関係のないことを話題にするので、高根がやってくると社内は妙に活気づいた。 ①「新橋烏森口青春篇」

(27)「さ、みんな、じぶんの名まえをよばれたら、大きな声でへんじするんですよ。——岡田磯吉くん。」 ①「二十四の瞳」

(28)「もちろん、喜んで就任する。大きな声では言えないが、いまの政党のありさまは、どうしようもない。…」 ①「人民は弱し　官吏は強し」

「大きい声」については、24例全てが、(26) のように、物理的に声が「大」であることを表しており、比喩的な表現は1例もなかった。

「大きな声」については、(27) のような物理的に「大きな声」が227例あり、(28) のように比喩的な表現が、11例あった。

今回の調査からは、「大きな声で言う」という時の比喩的な表現として使用される場合は、「な形」になりやすい傾向があると言える。

Ⅱ　家

「大きい家／大きな家」には、物理的に家が「大」であることを表す用例と、家柄や家族構成や家財の規模といったときの家の大きさが「大」であることを表す用例がある。

「大きい家」は4例、「大きな家」は10例あったが、全14例を比べても物理的な大きさを表す場合と、そうでない場合の「い形」と「な形」の使い分けは感じられなかった。

(29) 十九年の秋に湯島三組町から下谷西黒門町に前より一回り大きい家を借りて移ることになった　①「花埋み」

(30) その向いの河田は三年ほど前に火事で焼けて、前よりも大きな家を建てた。 ①「青春の蹉跌」

(31) 二十歳、十八歳という年頃の未婚の二人の義妹を持っているので、信子としては、彼女等の身の振り方を決めてしまうまでは、婚家を去りたくても去られない立場にあるというのであった。実際に七十近い姑と二人の年頃の義妹を持ち、大きい家の采配を揮っている信子にしたら、佐分利家から籍を抜きたくても、抜けない実情に置かれてあったかも知れない。 ①「あすなろ物語」

(32)「…儂はどうも松本家に談じ込んだという話からして派手で好かんわ。大病の娘を前にして掛け合うたところが気に喰わんのや。この家に話をもってきたのも直道の差金とは違うか。代々嫁をとるんに大きな家に目をつけるんが家風やったら儂には付き合いきれん」 ②「華岡青州の妻」

上記の (29) (30) のように、物理的に家の大きさが「大」であることを表す場合にも「い形」と「な形」の両方の形が用いられ、その場合の意味的な差はない。また、(31) (32) のように、家柄であったり家族構成や家財の規模といったときの家の大きさが「大」であることを表す場合にも「い形」と「な形」の両方が用いられている。

Ⅲ　男・人・人間

「男」や「人」や「人間」が「大」という場合、単に身体の大きさを表す場合と、人としての器や気持ちの大きさという人間性について表す場合がある。

「大きい男」は4例、「大きな男」は10例あった。

「大きい人」は2例、「大きな人」は5例あった。

「大きい人間」は1例、「大きな人間」は2例あった。

(33) なるほど、こちらのほうは基一郎の台詞「日本一大きい男」の名を辱しめなかったが、相撲の強さの点となるとそうもいかなかった。①「楡家の人びと」

(34) 大きな男は一寸きまりが悪そうに汗でしとどになった真赤な額を撫でた。①「生まれ出づる悩み」

(35) 岸本は気持ちの大きな男で、誰もが甘えたくなるようなふんいきを持っていた。①「塩狩峠」

(36)「おっきい人ね。なんていうの名前、おしえて？」①「新橋烏森口青春篇」

(37) 活動のスケールが大きい人ほど、第二カテゴリーの機能が高くなることはいうまでもない。③『適応の条件』

(38)「恭子さんが結婚したときには、ぼくはずいぶんとがっかりしたものですよ。ご主人はレスラーみたいに大きな人だったそうですね」①「砂の上の植物群」

(39) 三人組の男のうち一番体の大きな三十年配の一人が、小柄な川ちゃんの背広の襟首をつかみ、馴れたしぐさで足払いをかけた。①「新橋烏森口青春篇」

(40) しかし残念ながら、器量の大きな人は、もともとざらにいるような存在ではない。③『「ゆとり」とは何か』

(41) 足利尊氏という人間のことを、人物が大きい人間だったというようなことを言う人間がいるが、とんでもないことである。尊氏の人物を言う人は、よく彼の筆蹟を見て、いかにも豁達な字だということを根拠にしている。⑥『日本人の言語表現』

(42)「中学へ行けないくらいのことで、そんな考えを起こすやつがあるものか。そんなちっぽけなことじゃ、けっして大きな人間にはなれやしないぞ。」①「路傍の石」

(33) (34) のように、身体が「大」であることを表す用法については、意味的な差は感じられない。(35) (40) (41) (42) のように、気持ちや器量など人間性が「大」であるというように、抽象的なものごとについての大きさを表すのに「な形」が使用されるということは、先行研究で指摘されていたが、「気持ち」が「大」であるということを述べている用例が (35) (40) (41) (42) の4例のみであったため、「な形」に付きやすいと言えるものの、(41) のように「い形」で使用される例も4例中1例あり、「い形」

と「な形」の意味的差は見られない。

Ⅳ　鍵

「鍵」には、物理的な「鍵」と「キーポイント」というような比喩的な「鍵」がある。「大きい鍵」は1例、「大きな鍵」は3例あった。

(43) ドアの鍵穴に大きい鍵を差しこんだまま、管理人は振りかえって僕と女子学生を検討するように見つめた。 ①「死者の奢り」

(44) うまく「需要のバトンタッチ」が行われるかどうかが大きな鍵となろう。 ⑧『平成5年度版　経済白書』

(43) の「い形」の例は、物理的な「鍵」が「大」であることを示し、「な形」の用例は3例全てが (44) のように、「キーポイント」という意味の比喩的な意味で使用されている。

全部で4例しか用例がなかったが、今回の調査からは、比喩的で抽象的な使用の時には「な形」になりやすいと言える。

Ⅴ　兄・姉

飛田良文・浅田秀子 (1991) や佐々木文彦 (2002)、辞書等では、「大きい」は身体の大きさを表すだけでなく、年齢的に上であることも表すが、「大きな」は、年齢や成長を表す意味では使用されないとあった。

「大きい」に「兄」が付いている例は1例で、「姉」が付いている例が2例あったが、「大きな」に「兄」や「姉」が付いている用例はなかった。

(45)「もっと大きいにいさんはいないのかい。」 ①「路傍の石」

(46)「大きい姉さんの乳、西瓜みたいなやわ」 ①「華岡青州の妻」

(47)「大きい姉さんが死んだんは犬や猫を仰山殺した祟りやとみんな云うてるでえ」 ①「華岡青州の妻」

上記のように、(45) から (47) の3例全てが、年齢が上であることを表している。しかし、(45) は、単に年齢が上であることを表す「大きい兄さん」だが、(46) (47) は、何人かの「姉さん」がいる中の「上の姉さん」、つまり順番的にも上の「姉」を指している例である。

「大きい兄さん」「大きい姉さん」という表現が、先行研究で指摘されていたように年齢が上であることを表す表現として用いられることが分かった。出現数が少ないので断言はできないが、この場合、「大きな」という「な形」が現れないことも検証された。

Ⅵ　子・子ども（子どもたち）・生徒（生徒たち）

Ⅴの「兄さん」や「姉さん」と同じように、年齢の表現として使用されることが考え

られる「子」や「子ども」「生徒」に接続する場合について見てみる。

「大きい子」は2例、「大きな子」は4例あった。

(48) かえりに荒神さまをのぞいてみたが、スギの木かげにあそんでいたのはコトエよりすこし大きい子や、小さい子ばかりだった。 ①「二十四の瞳」

(49) あけみ：ばか何言ってんのよ、いきなりこんな大きな子が生まれる訳ないでしょう

寅　　：そりゃそうだ。すこしでかすぎるもんなアハハ　②「寅さん」

(50) 寅　　：さくらの子だよ

はるみ：へー、こんな、大きな子があ、どうも、ありがとう。 ②「寅さん」

(48) は「コトエ」より身体の大きさが大きい子どもという意味ではなく、「コトエより年齢が上の子ども」という意味である。(49) (50) についても、「身体の大きい子ども」ではなく、「成長した、年齢が上の子ども」という意味である。

つまり、「子」に接続し、年齢が上であることを表す場合は、「大きい」と「大きな」の両方の形が使用されることが分かった。

次に「子ども」についてだが、「大きい子供」は1例、「大きな子供」は、4例あった。

(51) 真鶴の漁師の子で、彼は色の黒い、頭の大きい子供であった。 ①「真鶴」

(52) 人間も、健康優良児などに選ばれる者は皆、体の大きな子供たちばかりであった。 ⑥『日本語をみがく小辞典 形容詞・副詞篇』

(53) 何故だ？何故だ？　大きな子供・子路にとって、こればかりは幾ら憤慨しても憤慨し足りないのだ。 ①「弟子」

(54)「だれか、男先生、よんできて。おなご先生が足のほね折って、あるかれんて。」ハチの巣をつついたような大さわぎになった。大きな子どもたちがどたばたかけだしていったあとで、女の子はわあわあなきだした。 ①「二十四の瞳」

「大きい」の例は (51) の1例のみで、連体節の述語になっているものである。「大きな」の例は、(52) のように連体節の述語になっているものが1例と、(53) のように比喩的に、身体は大人だが、精神的に子供であることを表している表現が2例、(54) のように年齢的に上であることを表している例が1例あった。

「生徒」についても、年齢的に上であることを表す例があったが、「大きい生徒」という用例はなかった。「大きな生徒」は以下の2例である。

(55) 殴られただけでも、利かん気の信夫は腹がにえくりかえるほど口惜しくて、自分より大きな生徒にかかってゆく。 ①「塩狩峠」

(56) しかし気づかれずに大きな生徒たちをやりすごせたのは、じつにマスノの機転であった。 ①「二十四の瞳」

(55) は物理的に身体が「大」であることを表しており、(56) は年齢が上であることを表している。

「兄」「姉」の場合、先行研究の指摘するとおり、「大きい」は身体の大きさを表すだけでなく、年齢的に上であることも表すが、「大きな」は、年齢や成長を表す意味では使用されないことが分かった。しかし、「子・子ども・生徒」の場合、「な形」でも年齢が上であることを表しているため、単純に「い形」と「な形」の語としての意味的差ではなく、慣習の問題であるのかもしれない。

しかし、子どもの場合は、年齢と大きさが比例して「大きく」なるので、純粋に年齢とは言い切れない部分もある。また、「子・子ども・生徒」の場合、単に年齢が上である、または自分と比べて年齢が上であることを表す例はあったものの、何人か年齢が違う者がいた場合の順番として上を表す用例はなかったので、詳しく年齢と「大きい」「大きな」の接続傾向について考察することはできなかった。

4.6. 「大きい」と「大きな」に他の形容詞が重なる場合

名詞を修飾する際に、「大きい」か「大きな」の1つだけではなく、形容詞を重ねて名詞を修飾する場合にどのような傾向があるのかを検証する。ただし、今回は「大きい／大きな」と他の形容詞の間に名詞などが挟まれている場合を除いて考える。

(57) その黒い大きい眼が鮎太を驚かせた。 ①「あすなろ物語」

(58) ぼくはそのことばの魅力でほんとうに未紀のなかへ吸いこまれそうだった。黒い大きな眼のなかへ。 ①「聖少女」

(57) のように「形容詞＋大きい」が2例、(58) のように「形容詞＋大きな」が30例あった。

(59) 女子学生は柔かく大きい掌をしていた。 ①「死者の奢り」

(60) ぎんは丸く大きな眼を真っ直ぐ友子に向けた。 ①「花埋み」

(59) のように「形容詞の連用形（～く）＋大きい」が5例、(60) のように「形容詞の連用形（～く）＋大きな」が17例あった。

(61) 原則として、その中で、より古くて大きい集団は格が高く、その反対は低い。 ③『タテ社会の力学』

(61) のように「形容詞の連用形（く）＋て＋大きい」は3例あったが、「形容詞の連用形（く）＋て＋大きな」は1例もなかった。

(62) 大きい、おいしい木の実からなくなって行って缶の底に南京豆ばかり残るのを防ぐためである。 ①「太郎物語」

(63) 土偶には目や鼻や口がつけられているとしても、極端に大きなまるい目や口がつけられているものもあれば、つよくつりあがった目をもつ獣めいた顔もある。 ④『日本の神々』

また、前に「大きい」もしくは「大きな」が来る場合、(62) のように「大きい＋形容詞」が2例、(63) のように「大きな＋形容詞」が31例あった。

(64) スロットマシーンは現金で、しかも大きく重い一ドル銀貨を使うのが面白かった。 ①「一瞬の夏」

(65) ミイラは別にして、いつか、オレ、ダイナモだかリアクターだか、何でもとてつもなく大きくて重くて長いもの運ぶ話読んだよ。 ①「太郎物語　大学編」

「大きい」の連用形に形容詞が接続する例として、(64) のような「大きく＋形容詞」という形が4例、また、(65) の「大きく＋て＋形容詞」の形が1例あった。

「大きな」は「大きい」の5倍以上の数があるので、単純に数の比較をすることはできないが、「大きい」もしくは「大きな」と他の形容詞が重ねられて名詞を修飾する場合、「大きな」になりやすいことが分かった。また、形容詞が連用形になっている場合は「大きい」と「大きな」の数の差が縮まり、形容詞の連用形に助詞の「て」が接続する (61) のような場合には「大きい」に接続していることから、「～い＋～い」という重なりを避けるために「連体形＋連体形」の重なりの時は「大きな」が好まれるのだと考えられる。

それでは、「大きい」もしくは「大きな」と形容動詞（な形容詞）が重ねられて名詞を修飾する場合は、どうなるだろうか。

(66) そしてその夜は、君のいかにも自然な大きな生長と、その生長に対して君が持つ無意識な謙譲と執着とが私の心に強い感激を起させた。 ①「生まれ出づる悩み」

(67) 僕が腹這いになっている身を起すと、目に映ったのは大きな大きな入道雲であった。 ①「黒い雨」

(68) 中七を“汽車の車輪”とすれば、たやすく定型になりますが、これでは「汽罐車」のまっ黒で大きな動輪がクローズ・アップされません。 ⑥『俳句のたのしさ』

(66) のような「形容動詞＋大きな」は6例、(67) のような「大きな＋大きな」が2例、(68) のような「形容動詞の連用形（～で）＋大きな」が3例あった。また、「形容動詞＋大きい」や「形容動詞の連用形（～で）＋大きい」はなかった。

(69) 従来、歴史学者や社会学者によって対象とされていたような、スケールの大きい複雑な社会（これを complex society とよぶ）――日本や西欧諸社会を含めて――をも対象とするようになり、数々の研究成果を生みつつある。 ③『タテ社会の人間関係』

(70) 私は、眼の前に坐っているこの大きく朴訥な男がボクシングを選んだということが誤りだったのではないか、と思うようになった。 ①「一瞬の夏」

(71) 世間には、こまごまとした小さな趣向をこらしたものを愛好する人がいるが、太郎は大きくて単純で強い表現を持つものに感動した。 ①「太郎物語 大学編」

(72) いつとはなしに石油がしみ出して来るので、これは埋蔵量の大きな有望な油田

という意味ではなく、むしろその逆である。 ①「山本五十六」

(69) のような「大きい＋形容動詞」は3例、(70) のような「大きく＋形容動詞」が3例、(71) の「大きく＋て＋形容動詞」が1例あった。(72)「大きな＋形容動詞」は3例あった。

「大きい」もしくは「大きな」が形容動詞と重ねて使用されている場合は、形容詞と重ねられている場合と違い、「形容動詞（～な）＋大きい」の用例はなく、「形容動詞（～な）＋大きな」が6例もあった。しかし、「大きい＋形容動詞」と「大きな＋形容動詞」が同じ用例数あるということは名詞に接続する「大きい」の全出現数が少ないことから考えると、やはり「大きい＋形容動詞（～な）」の方が「～な＋～な」よりは好まれると言える。

ここから「～い＋～い」や「～な＋～な」は好まれないが、名詞に直接接続する時は、「大きい」より「大きな」の方が選択されやすく、それが「形容動詞（～な）＋大きな」が「形容動詞（～な）＋大きい」より多く出現した要因と考察する。

5. おわりに

形容詞と連体詞のペアである「大きい」と「大きな」についての検証を行った結果、「い形」と「な形」の大きな違いは、意味より形式による傾向が大きいことが分かった。

意味的な差については、「い形」と「な形」において、先行研究で指摘されていた、客観的、物理的な大きさを述べる場合は「い形」を使用するのに対して、心理的な大きさを述べる場合は「な形」を使用するという使い分けは、同じ名詞に接続する「い形」と「な形」を比較した結果では、見受けられなかった。

一方、形式的な差については、先行研究でも指摘されていた「い形」の方が形式名詞に接続しやすく、連体節の述語には「な形」が来にくいということが証明された。また、連体節の述語に「な形」が来る場合は、主格を表す助詞は「の」になりやすいという傾向があることが分かった。

以下、本研究で分かった「大きい」と「大きな」の違いを簡単に表にまとめる。

特異点として、「大きなお世話」という慣用的表現や「大きな声」という比喩的表現、キーポイントという意味の時の「大きな鍵」は「な形」が使用されることや、「大きい口」が慣用句的に使用される場合は「い形」で使用されること、さらに、年齢を表す表現の時、「一番上の」という意味で用いられる場合は「い形」になることが挙げられる。

また、「大きい」もしくは「大きな」と他の形容詞や形容動詞が重ねて使用されている場合については、「～い＋～い」や「～な＋～な」は好まれず、しかしながら名詞に直接接続する時は、「な形」の方が選択されやすいことが分かった。今後、「形容詞＋形容詞」または「形容動詞＋形容動詞」の重なりの用例を検討し、今回の結果と比較していく必要がある。

	大きい	大きな	違い
名詞に接続 (全出現数)	495 例 (2393 例)	2563 例 (2563 例)	
形式名詞に接続する	149 例（約 30%）	65 例（約 2.5%）	形式名詞は「い形」に接続しやすい
連体節の述語になる	160 例（約 32%）	49 例（約 2%）	「な形」は連体節の述語になりにくい
連体節の主格を表す助詞	の：65　が：58 「の」「が」以外：37	の：47　が：1 ばかり：1	「な形」が連体節の主格になる場合、助詞は「の」が多い
○＋顔	物理的：2　慣用句：2	物理的：7　慣用句：2	
○＋お世話	なし	慣用句：10	「お世話」は「な形」
○＋口	慣用句：1	物理的 7　比喩：1(奈落は、大きな口を開けて獲物を狙っていた。)	慣用句の場合は「い形」
○＋目	物理的：9　慣用句 1	物理的：44　慣用句 1	
○＋声	物理的：24	物理的：227　比喩的(大きな声では言えないが…)：11	比喩的な使用の場合、「な形」
○＋家	物理的：3　規模：1	物理的：9　規模：1	
○＋男・人・人間	男：4　人：2 人間：1 物理的：6　精神的：1 (この 1 例は、連体節の述語になっている)	男：10　人：5 人間：2 物理的 14　精神的：3 (3 例中 2 例は連体節の述語になっている)	「な形」は、連体節の述語になりにくいにも係らず、連体節の場合でも精神的な時は「な形」になりやすい。
○＋鍵	物理的：1	キーポイント：3	キーポイントの意味の時は「な形」
○＋兄・姉	兄：1　姉：2 年齢が上：3（3 例中 2 例は、何人かいる姉の内の上の姉を指す例)	なし	兄や姉に接続する場合は「い形」
○＋子・子ども・生徒	子：「年齢が上の」の意味：2 子供：物理的：1（連体節の述語) 生徒：0	子：「年齢が上の」の意味：4 子供：物理的：1（連体節の述語) 比喩的（精神的に子どもの大人についての描写)：2 年齢が上：1 生徒：物理的：1 年齢が上：1	

参考文献

國廣哲彌　他（1982）『ことばの意味3 辞書に書いてないこと』平凡社　pp. 138-145「チイサイ・チイサナ、オオキイ・オオキナ」柴田武（1982）項

木之下正雄（1961）「連体節の主語につくノ・ガについて」『鹿児島大学教育学部研究紀要　人文社会科学編』13　鹿児島大学教育学部

木之下正雄（1970）「連体修飾節の主語は被修飾語になれないか」『鹿児島大学教育学部研究紀要　人文社会科学編』22　鹿児島大学教育学部

三枝令子（1996）「「小さな旅」と「小さい旅」」『言語文化』33　一橋大学語学研究室

佐々木文彦（2002）「「大きい声」と「大きな声」」『明海日本語』7　明海大学日本語学会

田窪行則　編（1994）『日本語の名詞修飾表現』　くろしお出版

塚原鉄雄（1964）「「暖かい」と「暖かだ」」『口語文法講座3　ゆれている文法』　明治書院

寺村秀夫（1982）『日本語のシンタクスと意味　第Ⅰ巻』　くろしお出版

寺村秀夫（1984）『日本語のシンタクスと意味　第Ⅱ巻』　くろしお出版

寺村秀夫（1991）『日本語のシンタクスと意味　第Ⅲ巻』　くろしお出版

寺村秀夫（1992）『寺村秀夫論文集Ⅰ』　くろしお出版

飛田良文・浅田秀子（1991）『現代形容詞用法辞典』　東京堂出版

森田良行（1977）『基礎日本語1―意味と使い方』　角川書店

『日本語学研究事典』　明治書院　2007年

『日本国語大辞典　第二版』　小学館　2001年

（なんば・ちはる　2008年3月博士前期課程修了）

参考
「大きい／大きな」に接続する名詞

	大きい	大きな		大きい	大きな		大きい	大きな
(お) やしき	2	11	功績	1	3	脳	0	3
あくび	0	5	声	24	238	葉	0	6
頭	1	6	黒板	0	4	場合	6	0
あな	0	7	コスト	0	3	杯	0	3
あやまり	1	3	コップ	0	3	箱	0	8
家	4	10	こと	40	12	場所	2	0
息	2	4	子供	1	4	柱	0	6
意義	0	3	困難	0	3	腹	0	4
池	0	6	差	0	27	ハンカチ	0	3
石	2	12	差異 (差違)	0	5	反響	0	3
いびき	0	3	魚	0	5	ハンディキャップ	0	3
意味	0	24	桜の木	1	3	被害	0	3
岩	0	9	皿	2	3	比重	0	7
インパクト	0	4	刺激	0	3	人	2	5
ウェイト	0	5	仕事	1	5	瞳	0	7
うそ	0	3	支障	0	3	病院	1	5
影響	1	62	失敗	0	3	ビル	0	5
影響力	0	7	島	0	4	不安	1	3
エネルギー	0	3	視野	0	3	袋	0	5
円	0	3	社会	6	0	負担	0	7
おせわ	0	10	社会問題	0	6	部分	0	6
音	1	18	写真	1	7	不満	0	3
男	4	10	集団	9	11	ブラックホール	0	7
男の子	1	3	商家	0	3	風呂敷包み	1	4
驚き	0	3	障害	0	7	分子	6	1
顔	5	16	衝撃	0	5	弊害	0	4
鍵	1	3	商売	0	3	へだたり	0	4
影	0	5	スケール	0	4	部屋	0	7
課題	2	8	成果	0	5	変革	0	40
かたまり	0	7	船体	0	3	変更	0	3
価値	0	4	相違	0	5	変動	0	6
活字	0	3	組織	3	3	方	15	1
金	0	4	損失	2	3	黒子	0	4
かばん	0	3	太陽	0	3	星	4	4
壁	0	9	打撃	0	9	ほど	10	0
からだ	4	23	建物	1	9	町 (街)	2	5
川 (河)	2	7	ため	7	0	まちがい	0	3
艦	0	4	溜息	0	5	松の木	0	4
関心	0	4	ちがい	0	29	ミス	0	3
感動	0	3	力	2	15	店	3	3
木	4	4	地図	0	3	耳	0	3
企業	0	4	乳房	0	3	魅力	2	4
危険	0	3	机	0	3	矛盾	0	5
傷 (疵)	0	3	包み	0	8	目 (眼)	10	45
期待	0	4	罪	0	6	もの	29	58
きっかけ	0	3	手	3	22	問題	2	40
規模	1	3	抵抗	0	3	役割	1	21
疑問	0	8	テーブル	0	5	屋根	0	5
共通点	0	4	掌	1	4	ゆがみ	0	4
亀裂	0	4	寺	0	3	湯呑	0	3
口	1	8	転機 (転期)	0	5	夢	0	3
契機	0	4	特徴	0	25	要因	0	9
欠陥	0	3	ところ	2	4	喜び	0	3
欠点	1	4	鳥	0	3	理由	4	11
櫟	0	4	流れ	0	14	旅館	0	3
原因	4	17	謎	0	3	ルックザック	0	9
子	2	4	波	0	6	ルビー	0	3
鯉	0	3	涙	0	4	環 (輪)	0	4
効果	0	6	にぎりめし	1	5	わけ	3	0
貢献	0	3	荷物	0	14	話題	0	3
工場	0	3	の	27	7	割合	0	4